

令和7年7月28日

清水町議会議長 山下 清美 様

清水町議会厚生文教常任委員会 委員長 田村 幸紀

研修報告書

清水町議会議員研修要綱第6条の規定により、次のとおり成果を報告します。

記

- 1 研修名（主催者） 厚生文教常任委員会視察研修
- 2 研修日時 令和7年7月14日（月）～15日（火）
- 3 研修先 大空町・音威子府村
- 4 研修目的 所管事務調査：高等学校の振興策について
- 5 成果

【視察の目的】

北海道における小規模特認校や地域と連携した特色ある高校教育の取り組みを学ぶため、大空高校（大空町）及びおといねっふ美術工芸高校（音威子府村）を視察した。

これらの学校では、地域の過疎化といった厳しい条件の中でも、地域と連携したユニークな教育を実践し全国から生徒を受け入れている。今回の視察では、学校の現場や関係者の話を直接伺い、教育内容や課題、そして町と学校の連携のあり方を把握することで、清水町教育の振興や地域活性化に活かすヒントを得ることを目的に視察研修を実施した。

【大空高校の概要と特色】

大空高等学校は、2007年に女満別高校と東藻琴高校が統合して誕生した、町立の全日制普通科高校である。地域と一体となった教育活動が大きな特徴であり、「ひとづくりはまちづくり」という理念のもと、「大空学」と呼ばれる地域探究型の授業を展開している。具体的には、町内外の事業者や団体と連携したインターンシップ、地域課題の調査・発信、町民と協働したプロジェクトなど、生徒が地域に関わりながら主体的に学ぶ機会が豊富である。

また、町が全面的に支援する「高校魅力化プロジェクト」により、学校に地域おこし協力隊や教育コーディネーターが配置され、教育活動の設計や外部連携が効果的に機能している。地域に根ざしたキャリア教育や学習支援体制が整っており、地元進学や就職だけでなく、都市部の大学への進学実績も年々伸びている。

【清水町への示唆】

清水町においても、少子化により中長期的な高校存続の見通しが不透明な中で、地域と密接に連携した「教育によるまちづくり」のモデルとして、大空高校の取り組みは大きな示唆を与えている。

町が「教育の支援者」として明確に関与している体制は、清水町が今後高校存続のために果たすべき役割や支援のあり方を考える上で参考となる。

【おといねっふ美術工芸高校の概要と特色】

おといねっふ美術工芸高校は、日本で唯一の村立高校であり、全国から工芸を志す生徒を集める「美術工芸系専門高校」である。全国募集により、現在の生徒の9割が道外出身であり、木工・デザイン・クラフトを中心とした専門教育を行っている。全寮制で、生徒たちは3年間を寮で生活しながら、家具製作やデザインの実技を集中的に学び、進学・就職いずれにも対応する教育がなされている。

また、音威子府村の基幹産業である木工や地域資源と連携した教育活動が展開されており、生徒作品の展示・販売や地域行事への参加を通じて、村と高校が一体となった地域振興が図られている。村外からの生徒が村の活力となっている点は特筆すべきである。

【清水町への示唆】

おといねっふ美術工芸高校は、近年進学実績も上がり、私立芸術大学や国公立大学、美術専門学校などへの進路を確保する一方で、教員の専門性確保、寮の老朽化、少人数指導体制の維持など、多くのコストとマンパワーを要している現状がある。村としても少ない財政の中でこの学校を支え続けるには限界が見えてきており、「高校存続＝村の存続」という危機感のもと、国や道への制度的支援が今後の焦点となっている。

このような現場から清水町が学ぶべきは、単なる生徒数確保ではなく、「町の存在理由と教育の関係性」に踏み込む姿勢である。つまり、地域資源と教育をいかに結びつけ、町の将来を託す若者をどう育てるかという観点である。仮に清水町が新たな教育モデルや専門性のある高校教育に取り組む場合、おといねっふのような“地域の核”となる大胆な教育のあり方を検討することができるかどうかである。

【まとめ — 清水町への提言】

今回の視察を通じて明確に感じ取れたポイントは、「地域と共にある学校」の在り方、そして学校が生徒に対して“目的を持てる学びの場”をどのように構築するか、という本質的な問いかけの存在だ。清水町においても、少子化の加速と進学環境の変化の中で、高校の維持・発展には、町全体としての明確な意思と戦略が必要となる。「地域に根ざし」「地域とつくり」「地域を変える」という3つの視点で、町のエデュケーションを描くべきときが来ているとも感じている。

加えて今回の視察で印象的だったのは、「目的を持って入学してくる生徒の熱量」が学校全体の活力を左右しているという点である。「なぜこの高校で学びたいのか」という問いへの答えが、生徒一人ひとりの中にあること。そしてその想いが学校の活力と持続性を決定づけるということである。

清水高校も、アイスホッケーという全国的に強い特色を有しており、競技や進学という明確な目的意識を持った生徒を全国から受け入れる体制が整っている。しかし、部活動やその他経済的支援制度は大きな“武器”ではあるが、あくまで“入口”であり、その先で「何を学べるからここを選

んだ」と言ってもらえるカリキュラムや体験の設計が真の魅力である。そうした学びの魅力を、町と高校が一体となって育て、外に向けて発信していくことが、今後の清水高校振興に不可欠である。

また、近年では様々な悩みや課題を抱えた若者・多様性を追い求める若者が増え、「普通であること」を求めがちな地方社会において、そうした若者を“特別扱いせず普通に受け入れる”ことも、現代社会に合った学校の新しい価値となりうるのではないかと付け加える。清水高校が、多様な個性と目的を持った生徒を迎え入れ、一人ひとりが自分らしく進路を切り拓ける学校となるように、町としてもより踏み込んだ教育支援と魅力形成に努めることを、今回のテーマ“高等学校の振興策”を多角的な視点で捉える中で重要な視点であることを最後に提言として加えたい。

別記様式（第6条関係）

令和7年7月28日

清水町議会議長 山下 清美 様

清水町議会議員 只野 敏彦

研 修 報 告 書

清水町議会議員研修要綱第6条の規定により、次のとおり成果を報告します。

記

- 1 研修名（主催者） 厚生文教常任委員会視察研修
- 2 研修日時 令和7年7月14日（月）～15日（火）
- 3 研修先 大空町・音威子府村
- 4 研修目的 所管事務調査：高等学校の振興策について
- 5 成果（具体的に） 別添のとおり

大空町

大空高校を視察して驚いた事がいっぱいでした。まず理念がしっかりしている。飛行機人というスローガンを中心にすえ、要は自立していくためにはどうしていくかを考え、人生設計も考え、高校時代に自分らしい生き方を探させるという学校方針がしっかりしている。その手段の一つとして海外留学支援がある。高校生のうちに海外に行くだけでもすごいけど、ちゃんと勉強する目的を持ってドバイやバルト三国に行くというのは驚いた。視野も広がるし、新たな価値観に触れられるかもしれない。感性が豊かになる。町立校だからできる事かもしれないが、海外留学支援という発想がすごい。公設塾などにおいて学習のサポートや地域との交流なども高校生にとって、有意義な施策である。寮も大事な施設であり、寮がなければ全国から生徒が集まらない。財政面に関しては町や国民の覚悟だと思う。優先順位を高校の存続を上位にするかどうかだと思う。ただ一点危惧するのは、今の校長、教頭が代わった時にこの運営が上手くいくかどうかだと思う。

音威子府村

おといねっふ美術工芸高校は村と運命共同体であり、高校が無くなれば村も衰退する。この良さは美術という単科高校で、美術が好きな生徒が集まるし、寮の支援策が手厚い。この美術工芸という分野を選んだのがおばらしい。

別記様式（第6条関係）

令和7年7月29日

清水町議会議長 山下清美 様

清水町議会議員 中河つる子

研 修 報 告 書

清水町議会議員研修要綱第6条の規定により、次のとおり成果を報告します。

記

- 1 研修名（主催者） 厚生文教常任委員会視察研修
- 2 研修日程 令和7年7月14日（月）～15日（火）
- 3 研修先 大空町・音威子府村
- 4 研修目的 所管事務調査：高等学校の振興策について
- 5 成果（具体的に） 別紙のとおり

○大空町

大空高校の挑戦

1. 人生100年時代におけるキャリアと学びの変容

現状 ①少子高齢化 ②A I やロボット技術の発展による産業構造の変化

③想定を超える自然災害 ④ グローバル競争の激化

今までの生き方、考え方、価値観、文化が通用しないことが増加

人生100年時代の人生とは

教育期 （22歳～30歳～80歳）

I 先が見通せない時代で、臨機応変に対応できる柔軟性と、自ら選択できる主体性が重要になる。

II 自分のできるスキルに対する職種の選択

年代や職種によりスキルの獲得が必要。

引退期 （80歳～100歳）

有形資産などによる生活

大空高校の「答え」

- ・自ら未来を切り拓く（エンジンをつけた）「飛行機人」を育む。

教科書や先生に引っ張られて
勉強する人間 ⇒ 人間

- ・ 自分で物事を発明、発見していこうとする
自分のエンジン（主体性）を持っているか
否かの違い

学校設立経緯

- ・ 平成18年 女満別町と東藻琴村合併 → 2つの高校
- ・ 2高校ともに定員割れ、地元からの進学率低下
- ・ 平成14年900人いた中学生が平成19年546人へ
- ・ 町内、両校統合に向けた、住民協議会、道教委と調整→令和3年4月、町立、全日制、総合学科の新しい高校開設

2、新設高校設置における「大空高校魅力化プロジェクト

- 生徒が「行きたい」と思う「魅力」づくりを目指す

町民を主体とした検討委員会の設置

「育みたい人物像」を町民が主体的に協議

キーワードは「飛行機人間」⇒予測困難な時代にあっても、自分の軸を持ち、多様な他者との対話や協働により、物事を成し遂げられる人を育む。

3、大空高校交流拠点施設運営

- ①公営寮
- ②公営塾
- ③高校生交流の場

4、学校運営予算

令和7年度全事業総額 2億9千7百万円 高校管理費、寮管理運営、その他

○音威子府村

北海道おといねっぷ美術工芸高等学校

○道内唯一の工芸専科高校であり、全国から芸術を志し、生徒が集う高校として、造形体験を通し創造力を育み、豊かな人間性の育成と個々の生徒の多様な進路目標を叶える、確かな専門教育を推進する。

○ 経営スローガン・ありたい学校の姿

- ・夢を語り感動があふれる学校づくり
- ・実現したい未来のために

○経営方針の中に、「持続可能な社会の創り手の育成のため、地域と連携・協働を図り「おと高」の特色化・魅力化を進める。」とある。

○おと高 × おといねっぷ村魅力化推進チームの立ち上げ

経営スローガンでもある「実現したい未来のために」の村や本校の「未来」があるために（存続していくために）、村と村立学校である本校とが連携・協働し、何ができるかを考えるチームを作りたい。また、本校のさらなる特色化・魅力化として、生徒の作品の価値づけを図るために何ができるかを考えるチームを作りたい。

（R5, 8, 18職員会議）

○ 音威子府村の人口 605人（R7, 6月末現在）

おと高関係137人（生徒、教職員等）。村の人口の22,6%（生徒が120人在籍すれば23,4%）が、おと高関係者→まもなく4分の1が？

ということは、

おと高が廃校になると、村は存続の危機。（当然、村立校である、おと高は村がなくなると高校もなくなるが・・・）⇒村とおと高は、同じ船に乗る運命共同体

○学校の変革

昭和25年 北海道名寄農業高等学校音威子府分校

昭和38年 科目「自動車一般」「製図」「機械」＊農業の近代化に対応

昭和53年 教科・芸術→「工芸」、科目→「インテリア実習」

＊地域産業である木材資源利用を意識

* 造形作家 砂澤ビッキが村へ転入・創作活動の拠点

* 村の第二期総合計画 「森と匠の村」づくり

* チセネシリ寮 完成 →村外生徒募集のため

昭和59年 村立校、全日制課程、工芸科(道内唯一)

平成14年 北海道おといねっぶ美術工芸高等学校

平成15年 2学期制、コース選択制 「工芸」・「美術」

平成19年 北海道東海大学との高大連携事業調印

現在、全校生徒 114名全員が寮生活 男子35名 女子79名

道内出身者 87名 道外 27名

令和7年度 音威子府村の予算

一般会計予算額 2,632,000千円(前年度比 24.0%増)

高等学校分予算 142,947千円(前年比 35.2%増)

第3期音威子府村まち、ひと、しごと創生総合戦略

おと高を中心に据えた村づくり

- ・ おと高の更なる特色化・魅力化が必要と考える→おと高と音村魅力化

推進チームの立ち上げ

- ・ 産学連携→道の主催する「ほっかいどう応援セミナー」により、セコマと村と産

官の包括、docomo, 旭川市、JR北海道とも。

- ・ 企業連携→まちかど美術館一荒井建設

- ・ 地域連携→ふるさと納税返礼品に生徒作品を納税者に送付

地域の公共施設へ生徒の作品展示

地域のキッチンカーにラッピング

- ・ おと高応援団(クラウドファンディング)

応援団一特別講師を招いた授業、芸術鑑賞、クリアファイル作成

高校生一応援団Tシャツデザイン、団員証デザイン、クリアファイルデザイン、

交流会、会報誌、など

先の2回の報告は、成果は書いていませんでした。今回のが成果として報告書します。

1. 大空町 大空高校について

「人生100年時代におけるキャリアと学びの変容」として現状を分析し、そこを生き抜く、自ら切り拓く（エンジンをつけた）「飛行機人」（グライダーでなく）を育む。

現状 ① 少子高齢化 ②AIやロボット技術の発展による産業構造の変化

③想定を超える自然災害 ④グローバル競争の激化

今までの生き方、考え方、価値観、文化が通用しないことが増加。

I 先が見通せない時代で、臨機応変に対応できる柔軟性と、自ら選択できる主体性が重要。

II 自分のできるスキルに対する職種の選択年代や職種により、スキルの獲得が必要。

新設高校設置における「大空高校魅力化プロジェクト」

○ 生徒が「行きたい」と思う魅力づくりをめざす

○ 町民を主体とした検討委員会の設置

○ 「育みたい人物像」を町民が主体的に協議

これらを町民が有識者を入れて協議し、これから生き抜く子どもを全国から募りともに成長し生きて行く。学校を運営するには、町の予算もたくさん使うが、その先に大きな希望も感じられ、エールをおくりたい。

音威子府村 おといねっふ美術工芸高等学校

音威子府村は人口605人の村です。（R7、6月末）

その中で、おと高関係者（生徒と教職員等）が、137人。村の人口の22.6%。

ということは、

おと高が廃校になると、村は存続の危機。（当然、村立校であるおと高は、村が

なくなると高校もなくなる・・・）

府村まち・ひと・しごと創生総合戦略

○ おと高を中心に据えた村づくり

- 1、村の振興の要となる高等学校の機能強化
- 2、卒業生の雇用の場の創出や多様な人材活躍・企業活躍の推進
- 3、おと高を軸とした人の流れ、卒業生や村外の人々とのつながりを築き、全ての世代が暮らしやすいまちづくりの推進
- 4、おと高生参加による個性的で安心して暮らすことができる魅力あるまちづくり

村と高校が連携・協働し、何ができるかを考えるチームを作りたい。また、高校の更なる特色化・魅力化として、生徒の作品の価値づけを図るために何ができるかを考えるチームを作りたい。

実践例

- ・道が主催する「ほっかいどう応援セミナー」により株式会社セコマと音威子府村が産官の包括連携を締結→ポイント還元商品、年賀状デザイン
- ・docomo, 旭川市、JR北海道 とも連携
- ・企業連携→まちかど美術館 建設会社の塀に絵を張る。
- ・ふるさと納税返礼品にそえる生徒作品を納税者に送付
- ・地域住民が利用する公共施設に生徒の作品展示
- ・おと高応援団（クラウドファンディング）

このように、様々なことを考えて持続可能な学校づくりのため、地域住民と連携・協働。ひいては、持続可能な村づくりのための地域と連携・協働。

○高校と村が連携して、持続可能な村づくりをやることができるのである。高校生も自分たちが村のために役立ち、村が活性化されていくとしたら誇らしい気持ちになるだろう。その体験が社会に出てからも役立つに違いない。

高校存続には、多くの町民を巻き込んで、知恵を出し合えばきっと良いアイデアが出せると確信を持った。

別記様式（第6条関係）

令和7年 7月17日

清水町議会議長 様

清水町議会議員 鈴木 孝 寿

研 修 報 告 書

清水町議会議員研修要綱第6条の規定により、次のとおり成果を報告します。

記

- 1 研修名（主催者） 厚生文教常任委員会視察研修
- 2 研修日時 令和7年7月14日（月）～15日（火）
- 3 研修先 大空町・音威子府村
- 4 研修目的 所管事務調査：高等学校の振興策について
- 5 成果（具体的に） 別添のとおり

○大空町

大空町は女満別町・東藻琴村が合併し 2006 年度に変更され新しい自治体となった。北海道大空高校は、女満別高校と東藻琴高校が統合し 2021 年（令和 3 年）にそれまでの道立の高校から町立の高校へと変遷している。

合併町村ということもあり、旧女満別町と旧東藻琴村において、この大空高校は旧東藻琴村地域に立地し、財政等の話の中で地域感情を聞いてみたが、当初は様々な問題点が指摘されていたものの、大空高校と地域との関わりを深く持つことにより、また、募集面において実績を積み重ねた中で、町民全体の理解は深まっているとのこと。

大空高校は総合学科として運営をされている。授業の中身については本町における清水高校とその内容は変わるものではないものの、地域みらい留学の制度を利用し、全国から高校生を受け入れている。

特筆すべき点は、町立の寮を完備し受入をしていること。このことは、後述する音威子府村と同じ考えであり、保護者や本人が安心して暮らすために、衣食住の充実は必須と感じた。金額ベースは毎月 6 万円～8 万円程度と説明を受けたが、決して小さな負担ではないものの、金額の妥当性は問題ないと思われる。

当初寮を開設するにあたり、入学人数が多くなり年度途中で増築する等、機動的な財政の支出は議会人として考えた場合、驚きがあるものの、今春 2 回目の卒業生を輩出するにあたり、その卒業後の進路を含め、現在までの入学者の人数から考えると順調と思われる。

町立高校への移管に際しては、コンサル会社と提携し現在も定期的な学校運営を管理してもらうために、年間 500 万円程度の委託料を支払っているが、このことについては、本町においても高等学校運営を町立で行うことを考えた場合、非常に難しく感じつつも、素人が経営するよりもコンサル会社を入れることは現状やむを得ないと感じる。

学校長にはお会い出来なかったが、コンサル会社からの推薦で民間出身の学校長との説明を受けた。また、教員は北海道教育委員会からの派遣であり、その給与は町からの支出となる。約半分以上は地方交付税措置を受けているものの、町立高校にする際のハードルの高さを感じた。また、WEB 授業を取り入れているが、その理由については、人材不足と経費削減が主たる理由とのこと。

高校生の満足度については残念ながら学校祭明けの休業日ということもあり、話は聞けなかったが、寮の見学の際にいた高校生に話し掛けると、生き生きとした印象で覇気ある雰囲気を感じ良い印象を得た。

高校の無い自治体は活気が無くなる！その想いで当時町立高校への移管を決断したのが首長とお聞きした。私もそのように感じる。10 代後半の若者が寄り付かない町は、その町の魅力に直結する。無論、人口減少時代においてこの考えも時代遅れなのかもしれないが、高校生を呼べない自治体に定住移住を積極的に叫んでも、それは自治体のエゴと見えるのは私だけだろうか。

○音威子府村

音威子府村は人口 605 人の村であり、約高校関係者（生徒や教員、その他働く方々）が約 150 名程度おり、おといねっぶ美術工芸高校を核とした自治体である。

生徒は原則音威子府村に住民票を移すこととし、道内はもとより全国からその特殊性があり注目を受ける村立の高等学校。

特化することにより、受験者も定員をオーバーしている事情を伺えば、特化することの大きな意味が理解できる。

村全体予算の 1/10 の 2 億を超える予算があり、こちらも大空町と同じく、教員の予算については町費であり、交付税措置により学校運営がなされていると理解する。学生は地元から進学しても、強制ではないものの 100% 村立の寮に入っている。

特別な広報活動をしている訳ではないものの、その名は全国に広がり、その取組が特殊なため、テレビを含めたマスコミに注目されやすい利点がある。

1 年生の授業を拝見させていただいたが、「カメレオン授業」の雰囲気を見て感じた中で、その特殊性を垣間見ることができた。

工業高校系の資格の教員は全道に多くいるものの、工芸に関する資格を持つ教員が少なく、教員の獲得には苦心する旨の話をお聞きしたが、美術工芸高校の中で、教員の皆さんの努力も見えない部分で苦勞していると思われる。しかし、そのかいがあつてか、多摩美術大学などの芸術系大学の進学や、令和 5 年には東京芸大への進学実績を聞くと、今後も益々高校自体は希望が持てるものと感じた。

寮生活においては 1 部屋 2 ～ 3 人程度で過ごし、食事及び生活環境も村を挙げての厚い支援がある。月々の寮費は 18 千円であり、高校生活や作品創作活動に没頭できる状況である。

生徒の進学に併せて、家族で移住されるケースもあり、高校を主体としたまちづくりの可能性も感じた。

ただ、視察をさせていただいた中で、踏み込んで発言はしなかったものの、総人口が 600 人程度の自治体において、将来的にどのようなようになるか見通しを立てるのは難しい。そのひとつとして、学校の経年劣化による改修や修繕、寮の改修・修繕等を考えたとき、大規模なことが必要となった場合の原資が見当たらない。このことについては、教育委員会関係者と話したものの、将来的な不安は少なからずあることを理解した。

○まとめ

高校振興を考えたとき、まず必要なのはその学校にどんな魅力があるのか。魅力の発信をするために、現状のカリキュラムの中で特筆されるべきと考える。同じ総合学科である大空町は、女満別空港が地域にあるように、飛行機人となれ！とのキャッチフレーズのもと、様々な角度から著名人の講演を含め、大空高校から飛び立て！といった方針と教員の意志共有を図り、現状やられている。

音威子府は高校と自治体の運命共同体といった中で、必至に取り組んでいる。

本町の清水高校と比較して考えたとき、まだ恵まれている感覚があるものの、大空町の人口 6500 人の町で取り組むなかには、まちづくりの中核の位置付けと感じた。清水は 8500 人の町としてまだ大丈夫という感覚でこれまで来たのは事実。しかしながら、中核の一つとしての位置付けをする必要を強く感じる。

清水町のこれまでの政策は、やはり 1 万人居たころの感覚であって、人口減少問題に取り組むならば、若い世代に魅力を感じてもらう。更には、長くこの町に住みたいといった政策的・社会的インフラ整備は必須と思う。

今回、単純に高校生向けの寮を作れば人が来やすくなるといった事もあるが、何よりも高校生が清水で学びたいと思える、特色を発信していくことが重要と思う。我々を含め町民が知らない取組があったり、優れた点は多々あると思う。

そのために必要なのは、継続して高校と交流をまずは持つこと。振興会任せにならずに、普段の中から清水高校と向き合っていく必要があると思う。

道立高校だから町としては入れない。意見をいう立場ではない。そんな議会内での対応が過去にはあったが、積極的な「お節介」は必要。

まちづくりとして考えたとき、縦割りの行政の枠を飛び越える英知が必要だと思う。そのためこそ、振興会の内容や予算規模も含め、町の積極介入をお願いしたい。

また、地域みらい留学が清水で始まっているが、住居・食事・アフターケアについて未整備のまま進んでいると感じる。すでに高校に来てくれている生徒を考えると、早急に制度整備をする必要がある。

別記様式（第6条関係）

令和7年 7月 〇 / 日

清水町議会議長

様

清水町議会議員

中 島 里 司

研 修 報 告 書

清水町議会議員研修要綱第6条の規定により、次のとおり成果を報告します。

記

- 1 研修名（主催者） 厚生文教常任委員会視察研修
- 2 研修日時 令和7年7月14日（月）～15日（火）
- 3 研 修 先 大空町・音威子府村
- 4 研修目的 所管事務調査：高等学校の振興策について
- 5 成果（具体的に） 別添のとおり

生徒が「行きたい」と思う「魅力」づくりを目指し公費を投じている。
学校が町づくりの重要な施設として「住民がー丸」となっ？色々な
支援をしている。
少子化の時代 長く学校が維持することを願う

別記様式（第6条関係）

令和7年8月6日

清水町議会議長 山下 清美 様

清水町議会議員 深沼 達生

研 修 報 告 書

清水町議会議員研修要綱第6条の規定により、次のとおり成果を報告します。

記

- 1 研修名（主催者） 厚生文教常任委員会視察研修
- 2 研修日時 令和7年7月14日（月）～15日（火）
- 3 研 修 先 大空町・音威子府村
- 4 研修目的 所管事務調査：高等学校の振興策について
- 5 成果（具体的に） 別添のとおり

メモ 7月14日(月) 午前10:00～

視察先 北海道大空高等学校

□北海道大空高等学校に係る取り組みについて

①大空町における高等学校支援策

- ・町立高校、総合学科への転換の経緯について
- ・学校運営に係る予算について
- ・地域との連携施策について
- ・学校の魅力発信施策について

②学校における教育実践

大空町の概要は、

平成18年に「女満別町」と「東藻琴村」が合併した。

人口は6600人(合併時8500人)

そのため町内には2つの高校が存在したが両高校ともに定員

割れが続き両校統合に向けた住民協議会が始まり

そこで高校魅力化プロジェクトが始動した。

高校の存続を目指すと存続しない、生徒が行きたと思う

魅力づくりを目指す。

住民を主体とした検討委員会を設置し「育みたい人物像」を

住民が主体的に協議をしたという。

そのなかで高校の教諭が集まり教育課程編成を検討し

授業手法の見直しについても検討したという。

そこで受け身となる知識詰め込み型から自ら考え対話し
解を導く力の育成への検討を開始したという。

また定期テストがなく、時間割もなし、細かい校則、固定担任制もない
校則については生徒達で話し合ってきたという。

また公設塾が設置され生徒の意思で行われる学習に対するサポート
や企業や大学の講師を招いたの講座やワークショップの開催、
地域の飲食店の協力を得て実施する高校生カフェの運営支援など
おこなっている。開講日時は、月～金曜日で放課後～20:25まで
おこなわれている。イベントがないと地域とのふれあいがたぬので
地域との交流も数多くおこなわれているという。
市民とのつながりがあってこそ高校生の成長にもつながっていると感じた。

メモ 7月14日(火) 午前10:00～

視察先 北海道おといねっぷ美術工芸高等学校

□北海道おといねっぷ美術工芸高等学校に係る取り組みについて

①音威子府村における高等学校支援策

- ・ 村立高校、工芸科への転換の経緯について
- ・ 学校運営に係る予算について
- ・ 地域との連携施策について
- ・ 学校の魅力発信施策について

②学校における教育実践

学校の変革

昭和25年 北海道名寄農業高等学校音威子府分校

昭和38年 科目「自動車一般」「製図」「機械」農業の近代化に対応

昭和53年 教科、芸術→「工芸」地域産業である木材資源利用を意識

昭和55年 千セネシ寮完成 村外生徒募集のため

昭和59年 村立校、全日制課程、工芸科

平成14年 北海道おといねっぷ美術工芸高等学校

平成15年 2学期制、コース選択制「工芸」「美術」

平成19年 北海道東海大学との高大連携事業事業調印

令和2年 創立70周年記念式典挙行

全校生徒114名全員が寮生活

男子35名(31%) 女子79名(69%)

道内出身者87名(76%) 道外27名(24%)

音威子府村の人口605人で生徒と先生で137人村の人口の226%となる

高校が廃校になると村は存続の危機、当然村立校である

高校は村がなくなると高校もなくなることになる。

音威子府村は、高校を中心とした村づくりをしているという。

そこで高校と村とで「魅カ化推進チーム」を立ち上げ

地域と企業とでなにかできないか考えたのが株式会社セイコマ

と、ポイント還元商品や、年賀状デザインなど考えたという。

またふるさと納税返礼品に横ユースターやポストカードなど生徒の作品を納税者に送付し作品を通し学校や村を知ってもらうために今年から考えているという。

それから地域住民等が利用する公共施設での生徒の作品展示。

保護者が経営するキッチンカーにラッピングしたり、音威子府カフェの内装工事やエコミュージアムおさしまでの活動をボランティアとしてやっているという。

音威子府の予算について一般会計予算額が26320004円。

高等学校費1429474円、校長、教頭、教員給与費1466004円

生徒募集について、ホームページやXティアの宣伝も大切だがSNSやインスタが効果があるという話。